

2021岡山市芸術祭

岡山市民の文芸

第53回岡山市民文芸祭受賞作品

一般の部

【現代詩】

◎岡山市長賞

和箪笥の中は

森本恭子

和箪笥の底の新聞紙を入れ替えよう
と引き出しを上から順に開けて
着物やシャツをすべて取り出した
底に敷き詰められて茶色く変色した
古い元号の新聞紙が現れる

私は独り 無言のまま作業する
一枚剥ぐたびに 桐の木本来の匂いと
湿気を吸つた古い紙の匂いが立ち上る
今まで自分の持ち場にいた新聞は
真新しい パリツとした紙とは違う
半ば朽ちかけた手触りがいとしい

見開きの新聞を両手で引き出す

廃棄される日に浴びる久しぶりの陽光
運命の日が来たね 今までお疲れさま
慎重に優しくしわをのばして畳む
強く触れると破れるほどもろいから

目を落とすと懐かしい広告が飛び込む
その頃 有名だった単行本で
夢中になつて読んだ記憶が蘇る
痕跡として残る宣伝文句の数々は
やがて私の想像力をかき立て
じんわりと胸が熱くなる

手元の新聞と時を共有した私は
束の間のひと時 その中をさまう
剥がれ落ちてゆく思い出や
こぼれ出てしまう喜びや悲しみに
自分の青春時代が美化されないことに
いささかがつかりしながら

箪笥の中で密かに呼吸し続けた衣装に
冷え込んだ六畳部屋の空気が入り込む
今日の新聞を何年か後に取り出す日
少し背伸びしていた私が懐かしいかしら
指先に箪笥の匂いがしみてくる
ようやくすべての入れ替えが完了した
ふと 誰かに話しかけたくなった

楽しい頭

久山順子

必死で覚えた カタカナ語
横を向いたら もう消えている
一字違えば 意味まで違う
知ったかぶりで 笑いが取れる
楽しい頭に なつていく

大事なもの だからなくしちゃ大変と
思つて仕舞つたことまでも 覚えてる
なのに分からぬ 仕舞い先
プレイバック、プレイバック
楽しい頭に なるもんだ

ほれ、あの人 人となりも顔も
分かるのに 名前がトンと出て来ない
諦めた頃 脈絡もなく湧いて出る
いらいら、ゆっくり 会話は続く
どうなつてのやら 楽しい頭

昨日出来たことが 今日はもう出来ぬ
不思議なことが あるものと
頭の中を 覗いて驚いた
老化と劣化で 目詰まりした
脳フィルターが 酸す楽しい頭

子供の頃から 何気なく見ていた老人に
いつの間にか なつてている
誰もがなれると 限らない老人に
なれただけでも ありがたい
なれたからこそ経験出来る 楽しい頭

見るとなるのは大違い 初めてする老人
よたよた、もたもたは 当たり前
何でこうなるの の失敗をする
失敗は嘆かず 笑えば楽しめる
楽しい頭に 乾杯を

楽しい頭は 退化じやなくて進化の証
命のある限り 人は進化する

味わう

岡

由美子

さあ 何から召しあがりますか
看護師の声かけに

食べたい食器を指さす

気管切開して 声の出ない私の伝達手段は
ジェスチャーと筆談のみ

二ヶ月間 経管栄養をしているうちに
嚥下機能が 大きく低下してしまった
誰よりも 食欲旺盛な私だつたけれど……
ミキサー食の小匙一杯を 口に入れてもらう
舌の上で転がし 献立表から探し当てる
白いのは お粥

サーモンピンクは 鮭のバター焼き

黄土色は かぼちゃの含め煮
モスグリーンは 小松菜の和え物
黄緑は キャベツと胡瓜のサラダ
食材の姿は とどめていないが
味覚で 何の献立かが解る
「味わう」 喜びを かみしめる

介護職だった八年間が 頭をよぎる
高齢者の食事介助には 毎日携わった
ペースト状のミキサー食が
何の献立なのか 考えたことはなかつた
ひたすら 気を遣つたのは
喉に詰まらせないこと
せかさないこと
少しでも多く 食べていただき」と
事故がないように
時間内に終えられるように
それらを 第一目標にしていた
「味わう」ということの大切さには
気がつかなかつた……

みごとに完食されましたね
看護師が わが事のように喜んでくれる
私は手を合わせ 頭を下げる
相手を思い遣る食事介助への感謝と
一口ひとくちを
味わいながら食べられたことへの
感謝をこめて

この世で一番

山 本 照 子

この世で一番広いものは
心だと聞いたことがある

小学五年生の時の国語の時間
その日の作文の題は「母」

鉛筆を持とうとしない私の傍らで先生は言う
「思い出でもいいんだよ」
しかし物心がついた頃には
母はこの世の人ではなかつた
わが家に帰つて目にしたものは
お握りをむすんでいる父の背中
陽の光をたっぷり浴びた布団のように
温かくて広い

「何かあつたのか」

ふりむきざまに父は言う
たちまち私は父の心にすっぽりと包まる

眠れない夜が続いて寄る辺のない私の体温が
夫との諍いを巻き起こす
自分の部屋に閉じこもつた私は
吉野弘の詩集を手に取る
そのなかの「祝婚歌」の一節一節が
五臓六腑に染みわたる
三度読み終えた時には
私は凧いだ海に浮かんで微風と戯れている
時空を越えて
私を波打ち際まで運んでくれた
吉野弘の想い

私は私の心で
人の想いをどれほど汲んできただろうか
翼を大きく大きくはばたかせただろうか
宇宙を確と抱きしめただろうか

初秋の青空は
静脈を流れる
血の音とさえも響きあうかのように
深く深く澄んでいる
その青空に両手を突つ込んで深呼吸した心が
果てしなく広がつていく

さいご

田房正子

「さいご」 どうなるんだろう」と私の母にぎやかな食卓には不似合いなほどの静かな口調に みんなの箸を持つ手が止まる 「それはもう びつくりするくらい垢ぬけて仕事も恋も手に入れるに決まっているつて私は とつさに

いつも母と見て いるドラマの結末予想をした 「ドラマ見るにも暑いわ この部屋」と長女 「エアコン 寿命なんじやない?」と次女娘たちは リビングのエアコンの寿命予想 「いやいや 熱くなるぞ 今年こそ優勝」夫は ひいきの野球チームの優勝予想 会話は キヤツチボールとは ほど遠くへたくそなバス回しで 迷走し 立て直すのに四苦八苦する

母が もしかしたら 自分のさいごを思ひ浮かべて つぶやいたのではないかと 私たちは 勝手に想像し 勝手に動搖する ひとつき 食べて 嘶つて 夕食が終わり 「おやすみ」と 夫は 一足先に席を立つさて そこからは いつもの女子会

母が言う

「ところで さつきの話だけど」 私にも 娘たちにも 緊張が走る 「さいご」 二月だつて あの雑貨屋さん 閉店するらしいよ さつきの「さいご」は このことだつたか 「セールするかもね」 「いいね 女子だけで 買い物行こう」 世代をこえても 女子の集まりは楽しく弾む

洗い物や片付けや 明日の下ごしらえを終え 家の中が静かになると 耳を澄ませる 母の部屋から聞こえる 新聞をめくる音 料理番組を見ながら うんうんと頷く声 戸の隙間から ほのかにもれる灯り そんなものを 全部寄せ集めて 安心をする また明日も あさつても ずっと こんな時間が こんな日々が続きますように 「さいご」まで

【短歌】

◎岡山市長賞

亡き姑の愛した一つ藤袴絶やさず育て供華に切るなり

佐藤恭子

乗客の視線あつめるバスのなか盲導犬のかほはやさしい
量販店に丸型掃除ロボットは客を避けつつ仕事続ける

前原和子

独り居の知人の厨に灯のともる小さくも確かに暮らしのあかり
イケメンの話になるとオクターブ声跳ね上がる八十の青春

岩本喜代子

新居明子

長森正子

【俳句】

◎岡山市長賞

山並みの抱き寄せにくる帰省かな

石川眞一

◇岡山市教育委員会教育長賞

二階へと猫を片手に遠花火

富士山友実

くちびるに喃語あふる五月かな

信安淳子

柔らかき絵筆で描く春の海

本城佳舟

産院の仄かな明かり木の芽雨

貝畠信行

【川柳】

◎岡山市長賞

感涙も挫折の汗も知るタオル

永見心咲

ダイアナを聞いてカツトの番を待つ

片山幾子

風鈴と打ち水我が家のSDGs

平元薰

いつの日かお洒落マスクを供養する

長島恵美子

定命が分かれば困るかも知れず

久山順子

花 束

久山順子

誰の目も届かない奥まった所に庭がある。紫陽花が色づき出す頃になると、この美しい花を一人で眺めるのはもつたいないと、私の血が騒ぎ出す。そこで通りに面した家の軒先を借りて、自由に持つて帰れる花束を、バケツに入れて置く案を思いついた。もう、20年は続いているだろうか。紫陽花の咲く頃、一ヶ月間ほど現れる、風物詩のようなもの。

このところの、何ともやるせないコロナの憂鬱を、少しでもこの花束で、癒やしてもらえたとの思いを込めて、今年のキヤツチコピー『コロナ禍 お花をどうぞ』の言葉を添えた札をバケツに掛けた。一日20束ほどの花束。

始めた頃は道を行く人の目に止まつて、足を止めて、このご時世、こんな奇特、黙つて貰つて行つてもいいのだろうかと思う、半信半疑の朝の三文の得の遭遇であつたが、今では施主不明の花束にも馴れ、紫陽花の花束の季節到来を、心待ちにしているファンが出来たことは、最上の喜びである。

早朝の涼しい内に、庭に出る。花束になりそうな咲き具合の紫陽花と、その組み合わせの花材を調達して、少しでも長持ちするように、心を込めて水揚げをする。珍しさから購入したものや挿し木で増やした紫陽花、種類も色も様々。ギボウシ、ホタルブクロ、縞ススキ、カキツツバタ、半夏生、藪カシジウなどを組み合わせて、私流の感性で作る花束に、同じものは一つもない。どんな人に貰われるのかなど、わくわくしながら花束を作る。

路地奥の炊事場の窓から、置いてある花束が少しだけ見える。花の好みはみんな違つていて、持つて行くときの行動が、また面白い。正直に一つの人。気に入つたものを手に持ち、次を手にしてどちらかに決め難くて、両方とも持つて行く人。あの人は3束も持つて行つたが、友だちに上げる分よね。障子に目があるわけじやなし、私もズルするかも。美し過ぎる花束の罪にしておこう。

もう、仕事のない独居老人ではあつても、早朝の2時間は貴重な時間である。「よう、そんなアホらしいことを、するんじやあ」と言う人、「そんな間があつたら、寝てる方間が、得」と言う人。今日も誰かが持つて行つて下さつて、空になつたバケツを提げて帰る快感、人それぞれ。「ありがとう」のメモが添えてあつたりすれば、また頑張れる。

81歳の健健康体、花束に出来る花が咲いて、貰つて下さる人がいて、軒先を貸してもらえるから成り立つ、ありがたい「花バケツ」なのである。去年は663束、今年は801の花束を置くことが出来た。今もめでたく無事に終了。

酷暑が続き、花たちは水を欲しがる。アンタラより老婆の命の方が大切よと思うが、美しく咲いた花だけが花ではなく、来年の花の準備を、花たちはもう、すでに始めている。私も老体にムチ打つて、水遣りと草抜きに励んでいる。気力と体力が要る花束作り、来年も、道行く人々に喜んでもらえたなら、いいなあ。来年の話をしたら、鬼が笑うとか。

きぼう

西崎良子

「きぼう」を観ました。国際宇宙ステーションISSの「きぼう」です。その瞬間を、うろうろ、そわそわ待ち、ドキドキ夜空を見上げたのは、二十四年前のヘルポップ彗星以来のことでした。

「きぼう」が六月一日の夜に、日本上空を通過することを知ったのは、前日のテレビニュースでした。アナウンサーは、この地区なら何時何分、この方向にと、詳しく伝えていた。そして、その「きぼう」には、日本人宇宙飛行士の星出さんが、ISS船長として搭乗している、ということ。

天候を心配していたが、当曰は、朝からよく晴れていた。岡山で観ることの出来る時間は、二十時五十一分だ。何度も、時間と方角を確認して、日の暮れるのを待つた。

懐中電灯だけ持つて、二十時二十分に出発した。五、六分歩いて目的地に到着。ここは、草だらけの狭い空間だが、空を見上げる場所。誰も知らない私だけの否、私と愛犬クロだけの秘密の場所なのだ。クロは、もういないが、ここでヘルポップ彗星の感動を共有した。

初めて観る青く美しい彗星に、思わず「おお」と、クロを抱き寄せた遠い日。一九九七年四月の、夜明け前のことだ。

五分前、あと五分。思い出に浸つている時間はない。日没の遅い六月だが、周囲の薄明も消え、星を待つばかりの空の色だ。息を止め、北東の空を凝視する。見逃しはないかと、まばたきすら躊躇してしまう。風が、遠慮がちに通り過ぎて行つた。

予定の時刻は、既に過ぎようとしているが、何も見えない。期待に満ちた夜空は、尚も無言を貫いている。大切な一秒が、心臓の音に重なりながら、どんどん消えてゆく。高まる期待が、時間と共に溜息に変わつてゆく。それでも諦め切れずに、夜空を見上げ続けた。

登場に前触れはなかつた。「きぼう」は、突然に現れた。小さな光の点が、次第に近づくのをイメージしていた私は、慌てて足下がふらついた。転んではならぬ、眼を離してはならぬ。見逃してなるものかと、体勢を立て直して光を追つた。

想像よりも大きな星の輝きだ。北東の空に突如現れた「きぼう」は、ゆっくりと天空を移動している。あの光の中から、星出さんが地球を見守つているのだ。思わず背伸びして手を振つた。見知らぬ人にも「星出さんが乗つているのですよ」と叫びたかった。

至福の時とは、束の間のことを言うのだろうか。突然現れた「きぼう」は、突然に消えた。息を止めて追つていた光が、中天で消えてしまった。雲に隠れたのだろうと、再び現れるのを待つこと五分、十分…。しかし夜空は、そのまま終了してしまつたのだ。遠去かる「きぼう」を見送るはずだったが…。

余韻残る夜空から地上に戻るには、深呼吸と、少しだけ時間が必要だつた。

さあクロよ、そろそろお家に帰ろうか。

かみかくし

大森博巳

その日、夫が、名古屋の「味噌煮込みうどん」を食べようといいだした。

食欲をそそるパッケージの写真ではなく、消費期限が近づいていることに気付いたからである。ならば、いろいろとバランスを考えつつ、ニンジンや椎茸、カマボコ、たまご、などを冷蔵庫から取り出した。それらを見て、夫は牛肉とネギを忘れるな、という。あわてて冷凍していた赤身の牛肉を電子レンジに入れ、解凍スイッチを押す。

そこまで準備をしたところで、屋外に保存しているネギを取りに出た。段取りの悪さに我ながらあきれつゝ、農家さんからいただいた自慢のネギの束の中から何本か選んだ。ようやく材料が揃つたところで小さな鍋を二つ用意した。火の通りにくい野菜はあらかじめ入れ、沸騰してきたところに生うどんを投入する。説明書通り、うどんが半ば茹だつたところに残りの具材を入れる。「よし！牛肉だ」と振り返つたところ、あるはずのものがなかつた。解凍した二百グラムの肉が忽然と消えていたのである。

そこに夫がやってきた。

「置いていたはずのお肉が消えたのよ。カマボコ多めでいい？」
さりげなく聞いたが納得してくれない。そして、本当に牛肉があつたのか、と疑う。そりやそうだ。わたしだつて疑いたくなる。言い訳も小声だ。

「固そうな赤身のお肉だわ、と解凍したんだから…。ピーちゃんかなあ」

ピーちゃん、とは四歳の雄の飼い猫である。それまでに、何度も窃盗未遂事件おこしている。かつお節、パックなど不用意に置こうものなら、くわえ去る。味付け海苔も油断禁物だ。ネギを取りに外に出た隙にネコババしたのだろうか。ただ、そういう時は、どこか後ろめたい表情であり、ペロペロと舌なめずりをし、念入りな毛づくろいをしている。ところが、そんな素振りは見せていない。

神隠し？

それでも、つくりかけのうどんは完成させなければならない。火加減を調整しつつ、猫が引きずりこみそな場所をのぞきまわる。赤い牛肉はマボロシだつたのだろうか…。うろたえる飼い主を尻目に主犯とめぼしをつけている猫はくつろいでいる。一匹には多すぎる分量だ。共謀犯もいるはずだ。犯人だとすると、猫たちはアカデミー賞ものの名演技である。あきらめかけていたとき

「あつた！」

夫が声をあげた。ラップに包まれたまま、電子レンジの横のすき間に落ちていたのだ。

猫の歯型も爪痕もついていなかつた。あやうく冤罪をまねき、ゴハン抜きの刑に処するところだつた。詫びる飼い主に猫は知らん顔だ。理不尽な疑いを辛がる様子もない。てんでに丸まつている姿を見ながら、いつもより静かにすすつたうどんは、すっかり煮詰まつていた。

幸せのかたまり

栗 原 由 美

コロナ禍で随分と会っていない友人にやつと会えた。それまでは年に一度は、福山から電車に乗りつてやつて来ていた。「チケットが当たったのよ」と私の分もちゃんと用意してくれて、歌舞伎も観たし、コンサートも美術館へも度々足を運んだ。

そして今回は手芸の大好きな彼女が見たかった、キルト作家蜷川宏子と蜷川実花の二人展のチケットを持つてやつて来た。

「やつとこれた」改札を抜けて近づいて来る彼女の変わらない笑顔に安心した。

会場に入ると一度に華やかな世界に包まれた。実花さんの大型写真。パネルは華やかという形容がぴったりである。淡い色彩を好み私でも鮮やかな色合いに心踊らされ、元気をもらつた。お母さんの宏子さんのキルトもパネル同様大作で、特に懐かしいと感じられる布を使つたものに心が奪われた。細やかな手作業に思わず「すごい」と連発していた。今回誘われていなかつたら出合えなかつた世界に、連れて行ってもらえて本当に良かった。

満足して会場を後にし、店舗の並ぶ一角で飛沫防止パーテーション越しにコーヒーを飲んだ。一人展の話で盛り上がつた。「簡単そうなのは作れるかなあ」と意欲を示すと「簡単に出来るよ」と彼女はペンを取り出した。トレイに敷いてある紙ナップキンに円を描き、縫い目を印して、縫つて絞つて繋げていくだけで、ひとつ的作品になると教えてくれた。

そして私達は次の目的地に移動しようと席を立つた。ペンを取り出した時、彼女のバッグから何かが落ち金属音がしたので、再度搜したけれど見つからなかつた。最初に支払う時、私の分も一緒に払ってくれたので、後で渡した五百円玉をそのまま彼女はバッグの脇ポケットに入れた。それが落ちたようだ。転がりもせず、テーブルの土台の下に入り込んでしまつたようだ。「まあこんなこともあるわ」と言いながら駐車場に戻つた。支払い機の前には、故障なのか作業をしている人達がいた。駐車券を渡すと「料金はいいですかから」と言われた。

「これってさつき落とした五百円玉と繋がっているよね」

二人で顔を見合わせて、笑いをこらえることが出来ないほどのテンションになつた。たつた五百円のことなのに面白がらずにはいられなかつた。

もう一ヵ所美術館を巡り終え、今流行りのカフェのデザートを食べながら彼女が言つた。

「幸せのかけらを取り出といいんだつて」心中から忘れていたかけら、埋もれているかけら、それはそな人にしか取り出せないものだ。幸せな出来事、瞬間、場面は思い出せば数限りなくあるはずだ。

「今これも幸せのかけらになるね」ふわつふわのパンケーキを口に運びながら言うと

「これは幸せのかたまりよ」と彼女は笑つた。

後日彼女からキルトキットが送られてきた。

「幸せのかたまり」となつて。

彼は恐竜

二土山 郁乃

彼は私の最初の勤め先に居た。

社会人とは名ばかりで職場ではどこか自分を仮置きしているようなぎこちない毎日の中で、彼は唯一心うちとけられる存在だった。彼の魅力は何といつてもその風貌にある。長く伸びた首と背中のゆるやかな丸み。尾は流れるような曲線を描き、体に比べて小さすぎる頭でどこか笑っているような切れ長の目は優しい。巨体ながらも威圧感がないのは、彼が誰とも親しくなりたいという気持を全身から発しているからだろう。とりわけ彼は子ども達に愛され、その歓声に囲まれる彼は羨ましいほど幸せそうだった。

昼の休み時間に余裕があれば、彼に話し相手になつてもらつた。もっぱら彼は聞き役だ。日々のつたない失敗やささやかな進歩。「やりたいこと」はまだ見えず、どこに向かうか分からぬ自分の人生の地図は白紙という不安。とりとめのない私の話に、彼は静かに耳を傾け、いつも最後にこう言つた。

「人にはそれぞれの役割があるさ。」

程なく短い任用期間を終え、私は彼といた場所を離れた。年末の慌ただしさの中での次の職場へと向かったので、彼と別れを惜しむ時はなかつたが、彼の言葉はいつもどこかで私を励まし続けてくれた。

その後長い勤めの明け暮れを経て、あの頃白紙だった地図には自分なりの道が書き込まれていつた。地図もそろそろ仕上げにかかるかという頃、偶然私は彼といた場所を訪ねる機会を得た。彼はまだそこに居るのだろうか?建物は新しくなり様子が変わつたと聞く。もしかすると彼も去つているのではないか?

ためらいながらも訪ねると、はたして彼の姿はそこにあつた。一新された周囲の景色に決して引けをとどらず、むしろ前以上に堂々とした雄姿に見える。かつての友が立派になつてているのは何より誇らしく嬉しい。彼をとり囲む子ども達の歓声もあの頃と同じだ。私は彼に呼びかける。

「幸せそうだね。」

「ありがとう。君は?」

「もちろん。」

彼の問いかけに、少し考えそして答えた。

それから時折に彼のもとを訪ねては、いろいろな話をした。別れてからの旅の数々。その途中の様々な出会い。知り得たいくつもの喜びや哀しみ。彼は相変わらず静かに聞いてくれる。その目は子ども達に向かうれる時と同じように優しい。

彼はつと待ついてくれる。変わらない強さと変われない哀しさを抱えながら、もう帰つてこない仲間やかつての友だち、そしてこれらの友だちも。いつかすべての「役割」が終わつたら彼に報告に行こう。その時に褒めてもらえるように、しっかりと地図を仕上げよう。

彼は恐竜。京山の麓のサイピア・太陽の丘公園で、長い首で空の彼方を見上げながら、今日も友だちが来るのを待つてゐる。